

## 外国人向け着地型まち歩きツアーの理論と実践

### Theory and Practice on Destination Oriented Community Tourism for Foreign Tourists in JAPAN

松村 嘉久\*・丸市将平\*\*

MATSUMURA Yoshihisa and MARUICHI Shohei

近年、まち歩きに注目が集まり、日本各地で様々なまち歩きが、観光や地域の振興と絡む文脈で展開してきている。本稿では、まち歩きの諸相を営利性と地域社会との関係から整理し、まち歩きのコース選定に向けた理論を模索したい。それらを踏まえて、筆者らの研究室が実施した外国人向け着地型まち歩きツアーのアンケート調査の結果から、コース選定とツアーの満足度との関係に迫りたい。

キーワード:大阪新今宮(Osaka Shin-Imamiya), 外国人個人旅行者(foreign individual tourist: FIT), 着地型ツアー(destination oriented tour), まち歩き(machi-aruki, community tourism)

#### 1. はじめに

近年、まち歩きが注目を集め、観光や地域の振興と絡む文脈で成長を遂げ、そのなかのいくつかは定着してきた感がある。健康の維持・増進目的のwalkingブーム、いわゆる団塊世代の存在、経済停滞による余暇活動の安近短化、テレビや雑誌のまち歩き特集の興隆など、様々な追い風も受け、日本各地で実に多様なまち歩きが実践されている。

そもそもまち歩きとは、「歩く」という身体的行為を伴い、まちそのものをテキストとして読み解き楽しむ、知的で本来は個人的に都市空間を消費する営為である。観光振興という文脈からは、この営為を自律的な事業として成り立たせることが、地域振興という文脈からは、来訪者を増やし地域社会との交流を促し、地域の底上げにつなげ住民の地域への愛着を深めることが、二つの大きな焦点となってきた。

読み解かれる対象としてのまちや住民と、読み解こうとする者を仲介するインタープリターの重要性も、近年注目され始めた。まち歩きを事業化するには、エンターテインメント性を持ち、相手のニーズを敏感に読み取り、臨機応変に対応できる経験と話術を備えたインタープリターの養成が欠かせない(松村2009a)。まち歩きの成否は、何よりもまち自体の魅力に左右されるが、「誰に何をどう見せるのか」というまち歩き現場でのインタープリターの力量も大きな鍵となる。

さて、まち歩きが興隆するなか、まち歩きコースの

選定そのものに関する理論的研究はほとんど進展していない。まち歩きのコース選定は、「何をどう見せるのか」を決定付ける要素であり、語らずとも魅力の溢れるまち歩きコースがあれば、究極的にはインタープリターも要らない。

本稿では、このような問題意識のもと、まず2章でまち歩きの諸相を整理し、まち歩きのコース選定に向けた理論基盤を提示したい。続く3章では、松村研究室が主催するFIT向け着地型まち歩きツアーで得られたアンケート調査の結果をもとに、2章で提示した理論の検証を試みたい。



図1 まち歩きの諸相の概念図

\*阪南大学国際観光学部・教授 \*\*阪南大学国際コミュニケーション学部国際観光学科・学部生



## 2. まち歩き諸相と理論構築に向けて

### (1) まち歩き諸相

まち歩き諸相を分析する視角としては、営利性および地域社会との関係の二つが大きな意味を持つ(図1参照)。営利性では、商業ベースでの存立を目指すのか、採算ベースかボランティア活動での維持を試みるのかで大別できる。一般に、前者で遊びの要素、後者で学びの要素が強くなる。地域社会との関係では、まち歩きの過程で地域社会とその構成員がどう参与しているのか、そこで得られた利益を地域社会にどう還元するのか、が重要な指標となる。その際、主に低開発地域の ecotourism など話題となる community-based tourism や community tourism の枠組みが有益であろう(例えば OKAZAKI 2008)。

日本人中高年を主な対象として、観光と地域の振興の両者が絡み、事業採算を考慮しつつ地域への愛着の涵養を狙うまち歩きは、「長崎さるく(2004)」から「大阪あそ歩(2009)」への流れのなかで、西日本では新しい市民運動として根を張りつつある。外国人対象のまち歩きは、通訳案内士制度の問題も絡み、完全な商業ベースのものから、国際交流重視のボランティア活動まで幅広く存在する。次章でふれる我々のまち歩きツアーは、図1の網かけ部分に相当する。

### (2) まち歩きの理論構築に向けて

現代の都市空間は、過去の様々な時代の空間編成が何層にも堆積して形成されてきた有機的存在である。我々が現代都市で見るのは、地表面に表出している時代性や特徴の異なる過去の遺物であり、都市空間ではそれらが互いに何らかの関連性を保ちながら、混在し並存するという特性を持つ。

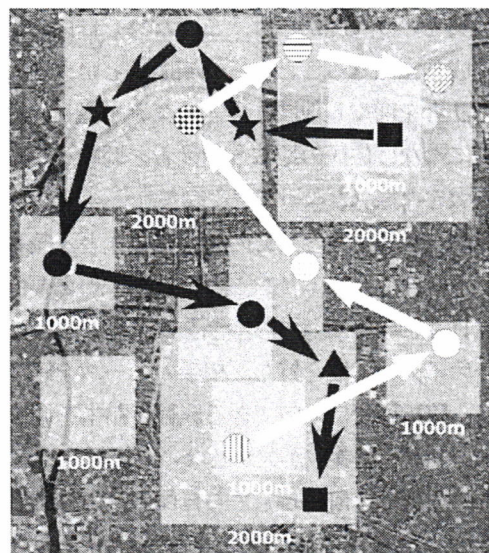
まち歩きコースを選定するのは、まちをテキストとして読み解く物語を作成するのに等しい。その際に語り易い切り口は、ある特定の時代性を追い求めて歩くか、ある同じ特徴を持つもの(テーマ性)を追い求めて歩くかである(図2参照)。いうならば系統地理学的まち歩きである。「大阪まちあるき」から例を挙げると、前者では「真田幸村と大坂の陣」、後者では「上方落語の舞台を歩く」がこれに当てはまる。

都市空間の多様な構成物から特定の時代性やテーマ性を追い求める系統地理学的まち歩きは、二つの宿命的な欠点を抱える(松村 2009a)。ひとつは、往々にして移動距離が長くなる点である。もうひとつは、歩いて移動するなかで、目的とする特定の時代性やテーマ

性のもの以外は目障りな存在と認識される点である。

とりわけ二つ目の宿命的欠点は、ポストモダンの状況下の空間的リストラクチャリングと絡み、本来多様な都市空間をある特定の時代性やテーマ性に向け純化させてゆく力を持つ。具体的には、都市空間のテーマパーク化やテーマパーク的都市空間の創造といった現象として立ち現われる。大阪でならば、前者は「串カツのまち新世界」や「焼肉のまち鶴橋」、後者は「生野コリアタウン」や「道頓堀極楽商店街(閉鎖)」が好例であろう。こうした不可逆的な都市空間の変容は、地域の魅力や集客力を高める一方、都市の多様性を奪い既存の地域コミュニティの崩壊を促しかねない。

改めて、まち歩きで重要なのは「歩く」という行為であり、そこに立ち返るならば、適正な移動距離や空間スケールが自ずと割り出せる。地域社会との関係がまち歩きの成否の鍵と捉えるならば、時代性やテーマ性を追い求めるのではなく、先に適正な空間スケールを決め、そこに混在し並存する様々な都市空間の構成物の関係性を読み解く発想が重要なのではなかろうか。具体的には、例えば1000m/2000m四方で都市空間を切り取り、その地域性を読み解くいわば地誌学的まち歩きである(図2参照)。都市空間の特徴が線形に展開する街道筋や河川流域の場合は、正方形が長方形になるイメージである。切り取られた空間のなかで歩いた軌跡を直線に戻し、その途上での見聞や体験を配列して、そのパターンとまち歩き参加者の満足度を分析すれば、まち歩きの評価が可能となる。



← 時代性追求      テーマ性追求  
図2 系統地理学・地誌学的  
まち歩きの概念図



### 3. 外国人向け着地型まち歩きツアーの実践と評価

#### (1) 新今宮 TIC 発の外国人向けまち歩きツアー

新今宮地域を国際ゲストハウス地域へ変貌させるため、阪南大学松村研究室が中心となり民設学営で新今宮 TIC を運営し始めた経緯はすでに発表した(松村 2009b, 松村ほか 2009)。大阪の「ありふれた日常」と「ささやかな非日常」を体験するというコンセプトのもと、2009 年からこの新今宮 TIC 発で外国人向け着地型まち歩きツアーを始め、2010 年 10 月末までに合計 11 回催行してきた(表 1 参照)。

2010 年に実施した 5 回のツアーでは、2 章で述べたまち歩きの理論を踏まえ、可能な限り 1000m 四方のメッシュを意識してコースを選定した。毎回のツアー終了時に、ツアー参加者の実態とツアーの評価を探るべく、17 問のアンケート調査を行った。ツアーの企画から実施に至る過程、新今宮地域のゲストハウスと連携した着地型の集客方法などは、2009 年と基本的に変わらない(佐藤ほか 2009)。

#### (2) ツアー参加者の属性

2010 年の 5 回のツアー参加者は合計 80 名であった。毎回の参加者数のばらつきは、ツアー内容による集客力の差異よりも、新今宮地域全体の宿泊客数の季節変動と連動していると考えられる。地域別に参加者の属性を見るなら、欧州・アジア・北米・オセアニアの順に多く、全体の男女比は男性 1 に対して女性 0.86 で、少し男性が多かった(表 2 参照)。この傾向はかつて松村研究室が新今宮地域に滞在する FIT を対象に行ったアンケート結果と同じである(有村ほか 2009)。国籍と現住地が異なるケースは 8 件あり、そのうち 5 名は日本在住の英語教師や留学生であった。

ツアー参加者は総じて若い。全体の約 8 割の 63 名が 20 代以下で、職業別に見ても学生が 29 名と 3 割強を占める。訪日回数を見ると、やはり地理的に遠い欧州・北米の初訪は 8 割を超え、比較的距離の近いアジア・オセアニアの訪日リピーター率は高い。オセアニアから新今宮地域に来るリピーターは、格安航空会社の開空乗り入れで確実に増えている。参加者の自己認識では、31 名が budget tourist, 27 名が backpacker, 21 名が common tourist, 2 名が bussiness man と回答している。参加者は FIT か日本在住者ばかりで、パッケージツアー客は皆無であった。FIT 参加者の日本滞在は最短で 1 週間、2 週間以上のものが 8 割を占め、大阪滞在は 1 週間以内の者が 6 割を超えた。

#### (3) 参加者のツアー評価

ツアーの総合評価では各回ともネガティブなものはなく、優秀 excellent 評価が 6 割前後を占めた(表 3 参照)。他の旅行者にこのツアーを推奨するかとの問いには全員が Yes と答え、再度ツアーに参加したいかとの問いにもひとりを除いて Yes と答えた。実費負担のみであることを差し引いても、ツアーのポテンシャルは高い。コース別にみると、B の総合評価が低く、A・D がやや高い。距離の評価では、B で「長い」が 2 件あったが、その他は適正から「短い」側に集まる。

スタッフのフレンドシップの評価は、B を除いて高い(表 4 参照)。一方、スタッフの英語解説の評価は A・E でやや高いものの、総じて低く、参加者 3 名から fair 評価を受けた。しかし総合評価の結果からみて、たとえ英語解説が拙くとも、魅力あるコースを選び、フレンドシップ溢れるスタッフと歩けば、国際交流重視のボランティアで行うこの種のツアーは成り立つ。

表1 新今宮TIC発の外国人向けまち歩きツアーの概要

実施日	まち歩きテーマ English Theme	参加者	スタッフ
4月21日 (火)	大阪の繁華街の裏路地を歩く Walking through the back lanes in Osaka's Entertainment Area	5	11
6月20日 (土)	大阪の職人芸を歩く Walking through the Sumiyoshi Shrine and Osaka's Artisans	10	19
6月21日 (日)	大阪のディープサウスを歩く Walking through the "Deep South" of Osaka	8	15
09年 7月12日 (日)	大阪の伝統集落を歩く Walking through the Traditional Community "Hirano" and Summer Festival of Kumata Shrine	25	17
7月19日 (日)	大阪のマイノリティの三角地帯を歩く Walking through the Multicultural Areas of Osaka and Enjoy the Danjiri Summer Festival	21	14
10月4日 (日)	大阪の職人芸を歩く Walking through the Sumiyoshi Shrine and Osaka's Artisans	9	15
3月31日 (水)	A 桜満開の大阪を楽しむ Let's enjoy walking tour for cherry blossom viewing in OSAKA!!	18	22
5月30日 (日)	B 新緑の古都・奈良を楽しむ Let's enjoy the ancient capital NARA during the season of new green leaves!!	11	19
10年 6月20日 (日)	C 住吉大社と堺のまちを楽しむ Let's enjoy Sumiyoshi Shrine and Sakai city!!	10	30
7月13日 (火)	D 平野郷で夏祭りやだんじりを楽しむ Let's enjoy summer Danjiri festival in Hirano Town!!	23	15
7月18日 (日)	E 生野で夏祭りやだんじりを楽しむ Let's enjoy summer Danjiri festival in Ikuno Town!!	18	24

表2 地域別に見たツアー参加者の属性

地域	実数	性別		年齢 20代以下	職業			訪日回数			
		男性	女性		学生	教師	その他	初訪	比率 %	2回	3回以上
欧州	33	16	17	26	11	6	16	27	81.8	4	2
アジア	29	17	12	20	15	3	11	11	37.9	5	11
北米	11	6	5	10	2	0	9	9	81.8	0	2
オセアニア	7	4	3	7	1	0	6	3	42.9	2	2
総計	80	43	37	63	29	9	42	50	62.5	11	17



もしツアーが有料ならいくら払うかという問いに、500円以下が29名いて、このうち6名は「有料ならたぶん参加しない」と答えた。しかし、1泊1,500円から3,500円が相場の新今宮地域に宿泊するFITのなかに、お金を払ってもよいとする人が存在する事実注目したい。FITの宿泊拠点である新今宮地域は、このような着地型ツアーが日常的に組めるため、リーズナブルで魅力あるまち歩きツアーを開発できれば、採算事業として成り立つ可能性を秘めている。

アンケートでは立ち寄り先の認知度と観光資源としてのポテンシャルも尋ねた。B以外はガイドブックに掲載されていない所を意図的に選んだので、立ち寄り先の認知度はとても低い。認知度が3割を超えたのは、Aの桜並木・天満宮、Bの興福寺・奈良公園・東大寺で、とりわけDとEの認知度はとても低かった。A・D・Eの全ての観光資源のポテンシャル評価は、優秀・良好の回答比率が7割を超え、逆に、Bの遷都1300年祭・興福寺・春日大社、Cの堺HAMONOミュージアムは、この比率が5割を切った。

興味深いのは、世界遺産の興福寺や春日大社よりも、桜満開の大阪天満宮、神前結婚式に遭遇した住吉大社、夏祭りに沸くローカルな寺社などのポテンシャルを高く評価している点である。まち歩きの途上で、参加者たちは商店街の魚屋に興味を示し、地元民との交流に目を輝かせた。DやEでは、まち歩きの途上で何度かだんじりと遭遇し、そのつど祭りで高揚した地元民と交流でき、それがまち歩きに心地良いリズム感を生み出したことが、図3から読みとれる。Aでは桜並木で出会った大道芸人、Cでは住吉大社での神前結婚式と鳳翔館でのお茶会が、同じ役割を果たした。

表3 ツアー参加者の評価その1

コース	実数	ツアーの総合評価				距離の評価				
		優秀	優秀比率%	良好	普通	長い	適正	適正比率%	短い	短すぎる
A	18	12	66.7	5	1	0	16	88.9	2	0
B	10	5	50.0	3	2	2	8	80.0	0	0
C	11	7	63.6	4	0	0	8	72.7	3	0
D	23	16	69.6	7	0	0	22	95.7	1	1
E	18	11	61.1	7	0	1	13	72.2	4	1
総計	80	51	63.8	26	3	3	67	83.8	10	2

表4 ツアー参加者の評価その2

コース	実数	フレンドシップの評価		英語解説の評価		払ってもよいツアー参加費				
		優秀	比率%	優秀	比率%	500円以下	500円以下比率%	1000円以下	1500円以下	2000円以下
A	18	14	77.8	8	44.4	4	22.2	8	6	1
B	10	5	50.0	2	20.0	5	50.0	1	1	1
C	11	8	72.7	2	18.2	5	45.5	3	3	0
D	23	14	60.9	6	26.1	10	43.5	5	4	2
E	18	14	77.8	9	50.0	5	27.8	9	3	0
総計	80	55	68.8	27	33.8	29	36.3	26	17	4

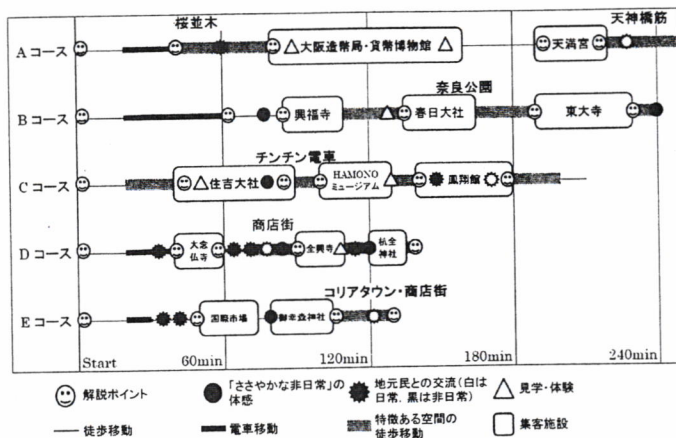


図3 外国人向けまち歩きツアーの行程比較

#### 4. おわりにかえて

近年勃興しつつあるまち歩きのムーブメントを、観光の最前線を切り開く我々は、決して一過性のブームに終わらせないよう、理論面でも実践面でも支援しなければならぬ。現在はまだ育てる段階にあるが、近い将来、日本各地でまち歩きコースが雨後のたけのこのように出現し、その評価を行うべき時が必ず来るであろう。本稿の視角が、その一助となることを願う。

まち歩きにおける地域社会との関係のあり方も真摯に議論すべきであり、まちを単なる消費の対象とせず、community-based tourism への転換が迫られる。インタープリターも参加者も、決して地域への乱入者であってはならない。いくつかのまち歩きで、それがモラルでなくマナーとして語られている点が強く懸念される。

#### 【参考文献】

- 1) 有村遊馬・松村嘉久・佐藤有 (2009) アンケート調査からみた新今宮界隈の外国人個人旅行者の実態報告, 日本観光研究学会第24回全国大会論文集, pp.341-344.
- 2) OKAZAKI Etsuko (2008) A Community-Based Tourism Model: Its Conception and Use, Journal of Sustainable Tourism 16(5), pp.511-529.
- 3) 佐藤有・有村遊馬・松村嘉久 (2009) 新今宮観光インフォメーションセンターの活動内容と利用実績, 日本観光研究学会第24回全国大会論文集, pp.337-340.
- 4) 松村嘉久 (2009a) 都市景観のインタープリターの育成と地理学の役割 (学会記事), 経済地理学年報 55-1, pp.88-89.
- 5) 松村嘉久 (2009b) 大阪国際ゲストハウス地域を創出する試み (神田孝治編「観光の空間」ナカニシヤ出版), pp.264-274.
- 6) 松村嘉久・佐藤有・有村遊馬 (2009) 新今宮観光インフォメーションセンター設立の経緯と運営戦略, 日本観光研究学会第24回全国大会論文集, pp.333-336.